第29号　平成13年6月

団塊のカタログ

ワシら

トシタロー●グラフィティ

まだまだ昭和31年、ワシが小学４年生。

続続・貸本屋

昭和の30年代、東京のそこら中に**貸本屋**があった。21号・22号で特集したが、何か物足りないので緊急追加融資する。

この年「こがらし剣士」で**白土三平**、「乱闘の剣」で**川崎のぼる**、「ロケットマン」で**水木しげる**がデビューしている。この３人とも貸本誌の人気作家であった。雑誌でいえば「影」「街」「怪談」「オッス」「魔像」などで、作者は**ゴルゴ１３のさいとうたかを**、**あぶさんの水島新司**、**漂流教室の楳図かずを**、**子連れ狼の小島剛夕**などである。

白土三平といえば「忍者武芸長・影丸伝」「カムイ伝」の作者である。血がドバーッと吹き出すわ、首がスコーンとすっ飛ぶわ、女の裸が出てくるわの残酷描写の元祖で、「サスケ」とか「ワタリ」などの健全な忍者マンガもあるが、どちらかといえばクロウト好みで、メジャーではない。

川崎のぼるはご存じ「巨人の星」の作者。時代劇でデビューしたとはこれまた意外だが、「ムサシ」もあるから納得いく。この作者、スポーツものなら他にも「アニマル１（ワン）」があるし、「荒野の少年イサム」のようなウエスタン風、「いなかっぺ大将」のようなギャグものもあったりして守備範囲は結構広いのだが、「巨人の星」の印象が強すぎて他の作品はカスんでいる。

目に炎、幅広の涙、ゆがむボール、大げさなセリフ回し、いつも同じ服で電柱から見守っている姉ちゃん、打席に立つと弟・妹が背後霊になって応援する左門豊作のニキビ面、ワザとらしい友情ごっこ、そしてガーンだ。

今なら笑えるが、当時はマジメに受け止めていたものである。有線のキッズ・チャンネルでアニメ版を見掛けるが、なんと、虹に向って走っているのは飛雄馬ではないか！

花形満ではないが「星くん、ボクは猛烈に感動している」のはワシらの世代で、今の子供たちには面白くも何ともないだろう。

なお魔球系の元祖は「ちかいの魔球」（ちばてつや）の**魔球**で、次は「黒い秘密兵器」（一峰大二）の**秘球**と**妖球**だが、巨人の星も含めていずれも「少年マガジン」の連載マンガというのは興味深い。さかのぼれば「くりくり投手」のドロッカーブ（ドロップしてカーブ。又はその逆）とタマタマボール（球がいくつにも分かれる）だが、この作者（貝塚しげる）は後に「九番打者」でジェット快球とスモーク快球を発表している。

少年マンガから魔球系が消えて久しい。

そして悲しい。魔・秘・妖・快・大リーグときたもんだが、次はなんでしょ。

水木しげるといえば、これっきゃない「ゲゲゲの鬼太郎（きたろう）」だが、そのデビュー作が「ロケットマン」とは！

３年後に「鬼太郎夜話（やわ）」を発表し、これが後に「墓場の鬼太郎」と改題された。

どちらも貸本屋でしかお目にかかれなかったものだが、その薄気味悪さは目を引いた。

墓場と霊界が主な舞台（メイン・ステージ）という設定だから、

それもやむを得ないだろう。

そんな鬼太郎、昭和40年から「マガジン」に連載を開始、この時に「墓場」はいくらなんでも少年マンガのタイトルとしてふさわしくないというので「ゲゲゲの鬼太郎」と再び改題され、かつてない画風と舞台設定から人気爆発、さらに３年後にはアニメ化され、それにつれて可愛らしくなってきた。

スタートはマイナーの貸本屋、その中でも暗さと気味悪さでさらにマイナーだった作品が、２度にわたる改題を経てキャラクターの設定（目玉のオヤジ、ネズミ男など）だけをそのままに、内容をガラっとかえてメジャーの週刊誌に連載され、アニメにもなってチビっ子の人気者になる・・・こんなパターンは後にも先にも「鬼太郎」だけであろう。

「夜話」「墓場」時代の気味悪さ、とてもじゃないが小学生には見せられない。そういうワシはその頃に見たのだが、そんな異色の隻腕（せきわん）（水木さん、片腕がない）劇画家のデビュー作が「ロケットマン」とは！

この頃のCM

♬ジン・ジン・ジンタン
　ジンタカ・タッタッター
ジン・ジン・ジンタン
　ジンタカ・タッタッター
みんなそろって　ジン　タン　タン

会社名イコール商品名の代表選手の**仁丹**が薬らしからぬ軽快なCMソングでイメチェンに成功、この後グリーン仁丹・梅仁丹とバリエーションを広げ、ガムの世界にまで進出するきっかけになった。もとはといえばお口の臭い消しとか清涼剤、となれば子供らにはおよそ用はないはずだが、仁丹に良く似た小粒の砂糖菓子があったりして、なんとなくなじんではいた。ふだんは買ってまで食おうとしないこの仁丹菓子だが、なぜか遠足には必ず持って行ったもので、バスに酔った時に効くと思い込んでいたのだろう。

この頃の子供が好奇心から口にして、必ず顔をしかめるものが二つある。

一つは酒、もう一つはホンモノの仁丹で、どちらもひたすらニガい。

十何年か後、酒の苦さがうまく思えるようになり、飲み過ぎた翌朝の仁丹に清涼感を覚えるようになって、これでワシもオトナだわい！と妙に感動したものである。

その深層心理に、この突撃マーチ風の威勢良い曲が関係あるのかもしれないが、今では懐かしのCMになっている。

歌は世につれ、余は満足じゃとよく言われるが、クスリにも当てはまりそうだ。

昭和30年代には各社競って総合ビタミン剤を開発し、テレビのCMにも次から次へと登場するようになった。その一つが武田薬品の♬パンパンパンビの**パンビタン**で、♬ジンジン・ジンタンもそうだが、♬パンシロンでパンパンパンとか♬ロート・ロート・ロートなどなど、製薬会社のCMにクダらないのが多いのは、仁丹マーチからかも知れない。

ヒッチおじさん

アルヒレッド・ヒッチコックといえばスリラーの巨匠だが、別に彼が監督したわけではなく、頭とケツにチラッと出てきて解説するだけなのだが、ドラマ作りがしっかりしていて、大人にも子供にも人気があった。

30分でオチを付けるミニ・ミステリーで、その後の「世にも不思議な物語」（35年）や「ミステリー・ゾーン」（36年）の先駆（パイオニア）けといっても良いだろう。

一時間番組でエピソードが３つ、各コーナ

ーの解説をタモリが受け持つ「世にも奇妙な物語」（フジ）というのがあった。

タイトルは「世にも不思議な物語」を、著名人が解説する点は「ヒッチコック劇場」をパクっているのはすぐわかる。それはともかく、当時の小学生でヒッチコックの名作を映画館で見たヤツなどそういなかったから、ワシら団塊の世代にミステリーの面白さに触れるキッカケを与えてくれたのが「ヒッチコック劇場」だといってもいいだろう。

ヒッチコックの作品をホンモノの劇場で見てやれとばかりに映画館に出かけ、あらためて彼のファンになったヤツは少なくない。

映画のワンシーンに彼がチラッと登場することは良く知られていたから、テレビで見たことのあるデブのおっさんを探す楽しみもあった。「あれだよ、あれ。テレビと同じ顔してらァ」・・・当たり前である。

なおヒッチコックの声は熊倉一雄（くまくらかずお）さんで、♪ゲッ　ゲッ　ゲゲゲのゲー、あの「ゲゲゲの鬼太郎」をオリジナルで歌った人（吉幾三（よしいくぞう）ではない！）であるが、ヒッチおじさんのとぼけた味をいかにもそれらしく、あのブットい声で我々に紹介してくれた。

ヒッチコックの熊倉一雄（くまくらかずお）、ウオルト・ディズニーの小山田宗徳（おやまだむねのり）、スーパーマンの大平透（おおひらとお）の組み合わせは永久に不滅である。

ルーシーおばさん

お笑いの本質はナマにこそある。

うんと古くなら「お笑い三人組」（昭和31年）「番頭はんと丁稚どん」（34年）「デン助劇場」（35年）「てなもんや三度笠」（37年）、さらには「欽ドン」（50年）など一連の欽ちゃんものとか吉本新喜劇もナマだからこそ楽しめる。本来は劇場まで足を運んでの純ナマが一番だが、それでは限られてしまうから中継録画にするわけだが、いずれにしてもスタジオでは面白さが半減する。

編集が出来ず、やり直しも利かないからこそ、役者と観客の真剣勝負が舞台を盛り上げるのだ。それは悲劇でもその他の演劇も同様だが、喜劇は客の反応に応じてどんどんアドリブが利く。「お客さんシーンとしてるやないけ」（笑）「台本とちゃうやんけ」（笑）「そうでっしゃろ、お客さん」（笑）「ここはオンドレが笑い取るとこやないやろ」（ハリセン）他の演劇ではこうはいかない。

一方スタジオ録画は予算ははるかに少なくて済むし、場面転換も楽で時間差収録も可能だから、俳優の日程も合わせやすい。

というわけで今ではほとんどスタジオ録画になったが、ナマなら聞こえてくる他人の笑い声がないのがもの足りない。そこであのわざとらしい笑いが入り込んでくるのだ。

この背景の笑い声（バック　ラーフター）を我が国に初めて紹介したのが**アイ・ラブ・ルーシー**である。

ルシール・ボール演じるルーシーおばさんは陽気な独身女性で、これにもう一人のおばさん（名前は忘れた）がからむ。

スタジオにセットされたルーシーのリビングを舞台に、アメリカ人好みのしゃれた会話が売り物だった。ウイットとユーモア、そして皮肉がてんこ盛りの会話・・・・これが日本人にもウケ、奇跡の長寿番組とさえいわれた。

「８時だよ全員集合！」も長かったが、悪ふざけとドタバタとシモネタばかりで、とてもじゃないが輸出できる代物ではない。

ちょっとだけよ、カラスの勝手でしょ程度が長い間日本人にウケた事実、製作担当者も我々も海外に知られたくはない。

笑いはその人の理性だ。シモネタと会話、比べるのもイヤだが、「ルーシー」から始まったバックのワザと笑いの良いところをしっかりマネしているのはご同慶の至りである。

アメリカ製アニメ

前年の「名犬リンチンチン」に負けるなと「**名犬ラッシー**」の放映が開始された。

西部劇のリンティーと違ってこちらは現代劇だが、お子様向けにふさわしく良心的な悪役が登場し、ドラマのオチをワン公の大活躍でつけるところは変らない。

ポパイ＋スーパーマン＋ミッキーマウスのぜいたくアニメが「**マイティマウス**」だ。

スーパーマンのように空は飛べるが、変身はしない。ブルートがブ厚いお口をとんがらせてオリーブに迫る。あわやキスされそうになる。「ポッパーイ！」と叫ぶ。「オウッ、なんてこった！」ほうれん草を口にほうばって現れるポパイと同じように、美少女ネズミが危機一髪になるとマイティーの出番だ。

ト・ト・ト・ツー・ツー・ツー・ト・ト・トの信号音が流れ、画面にギザギザのSOSの文字が出てくる。右の耳が急に大きくなり右手をその耳に当てると「マイティマウス、助けて～」と聞こえる。

頭の中にHELPの文字と美少女ネズミが映される。勇ましい音楽と共に空を飛んでかけつけるところはスーパー・マンそのもの、むろん観客の期待を裏切ることなく、危機一髪に間に合い、悪いヤツをブチのめしてくれる。顔つきはミッキー、体格は逆三角形の筋肉ムキムキのポパイ、空を飛べるところはスーパーマン、これがマイティマウスなのだがあまりにも欲張りすぎたからか、かえって印象が薄くなってしまったようだ。

有史以来の究極のナンセンス・ギャグアニメといえば「**ヘッケルとジャッケル**」だ。

さぁ今日のヘッケルとジャッケルはどんなイタズラをするのかなぁ、なんて牟田悌三（むたていぞう）のナレーションから話はスタートする。

この極悪２人組の犠牲者は大体お巡りのブル公だ。例えばプールの飛び込み板の先っちょに追いつめられたりするのだ。

「だんな、お願いだ、見逃してくれー」と手（ハネ）を合わせて頼むのだが、むろんブルは許さない。「覚悟するんだな！」とピストルを突きつけるブル、ところが２人組は飛び込み板の下を走り抜けていなくなる。

キョロキョロさがし回るブル、するとどこからかギーコ・ギーコと音がする。

音のする方に顔を向けると、どこに用意しておいたのか、２人はノコギリで板を切っている。やがて飛び込み板は切れてしまうが、なぜかブル公はしばらく宙に浮いていて、足元に板がないのを確認してから、あらためて下のプール目がけて落ちて行く。

ヘッケルとジャッケルはブルより早くかけ降り、これもどこに用意してあったのか、ストローを取り出してプールの水をイッキに飲み干してしまう。んなバカな！と思う間もなくプールの底に頭をぶつけるブル。頭には星が飛び回る。普通なら死ぬが、漫画なのですぐ生き返り、再び追っかけっこが始まる。

走っている姿そのままに塀をぶち抜いたりドアと壁の間にはさまれてペッチャンコになったりしながらも、追いつ追われつをくりかえし、最後に逃げ込んだところが警察の護送車だったりする。遠ざかって行く護送車に合わせて画面も小さくなり、ヘッケルとジャッケルが顔をのぞかせ「まだまだ続くよ」とほざいてエンド・マークが出てくる。

日本人が西洋から吸収したいものの一つにユーモア感覚がある。この絶好の教材がナンセンス・ギャグだと思うのだが、最近ではほとんど登場してこない。アメリカものは他では「珍犬ハックル」「チキチキマシン猛レース」「進めラビット」「大魔王シャザーン」「少年シンドバット」がお気に入りだった。